

馬場ひでゆきの活動日誌

No.82

9月議会の論点・その3

水管破断の原因と今後の課題について

今夏の水不足問題、根本的な解決がなされたのかどうか。新潟県の発表資料、私の県議会などの質疑でわかったことをまとめてみました。

●水管破断事故の原因は？

新潟県企業局は、10月8日、県営高田発電所の水圧管路破断事故原因の調査結果を公表しました。それによれば、発電所付近は地すべり地形で、今年の3月下旬に高温が続き多量の融雪水が地山に浸透したことで、水圧管路への土の圧力が増大した。土圧により水圧管路も損傷し、水圧管路から漏水が発生、漏水により地山の変位がさらに増大して、土砂崩と水圧管路破断に至った、とのことでした。

●水不足は解消されたのか？

県は、8月30日に、後谷ダムと発電所、城山浄水場をつなぐ水圧管路の仮設工事を完了しました。これにより、1日最大2

万³の送水が可能になりました。ただし、これではまだ城山浄水場の従前の能力（1日4万³m）には足りていません。そのため、県は11月末までに送水量を最大4万³mに引き上げるように水管の増強工事を完成する予定です。この工事が完成すれば、今回の水不足問題は、とりあえず解決したということになります（左上図参照）。

●県と市の費用負担の割合は？

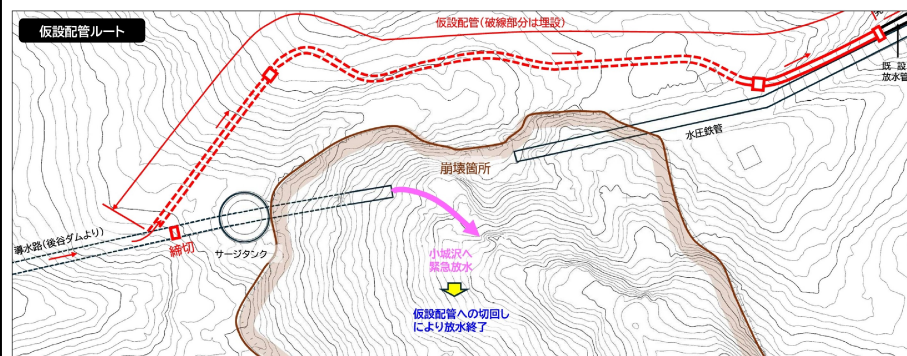
今回の水管破断事故が原因で、①県は、破断した管路を繋ぐ仮設配管の工事（前述のとおり）をし、②上越市は7月の断水回避のために、消雪用井戸からの取水、綱子川からの取水のための管路敷設工事などをしました（日誌70、72号）。いずれも巨額の工事費用が発生しましたが、費用全体の負担割合はどうなるのでしょうか。県も市も「協議はこれから」としています。私は、10月8日の建設公安委員会での次のおり主張しました。

「上越市の水不足は県が管理する水管の破断が原因となっていない。だから、県は①のみならず②についても責任を負うべきである。費用全体の負担の割合については、高田発電所の所有割合が県7・市3であることから、少なくともそれを基準に決められるべきだ」

●残された課題は？

左下図は、後谷ダムから城山浄水場への水管の経路を地すべり地形図に落とし込んだものです。この付近は、地すべりが生じやすい地域です。今回の仮設の水圧管路は、地すべり地形を回避して設置されていますが、事故になっていない管路は地すべり地形の部分を通っていることがわかります。

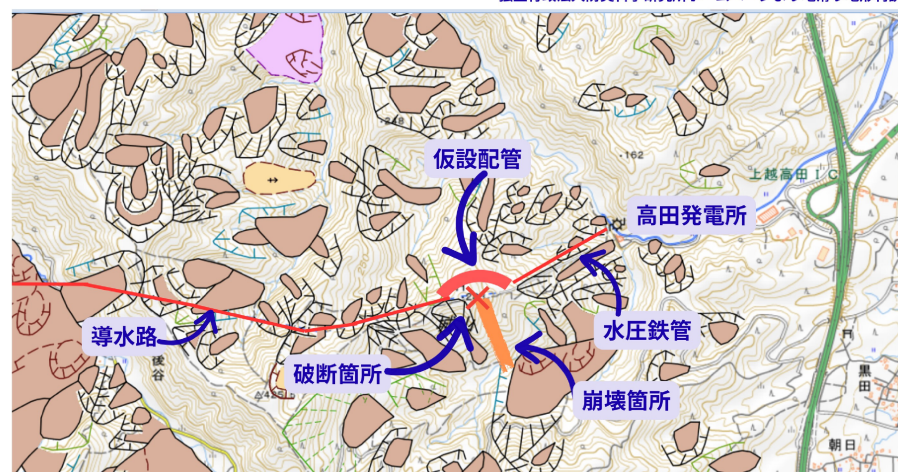
水圧管路の施設全体が40年を経過し、老朽化してきていることを考えると、後谷ダムとは別の取水源を確保することを考える時期ではないかと思っています。



上の水管経路を、地すべり地形図面に落とし込むと↓の図になる。

地すべり地形図に当てはめた破断箇所・崩壊箇所付近図

独立行政法人防災科学研究所ホームページより地滑り地形判読図



→ 明瞭な地すべり地形を表しています

県の水圧管路の仮設工事完了や上越市長選挙もあり、上越市の水不足問題は忘れられた感じですが、水圧管路のある付近の地形をみると、今後もまた事故が起こるのではないかと不安に思います。

上越市の国際交流の拠点 上越市国際交流協会創立30周年記念式典

10月25日、上越国際交流協会（JOIN）の創立30周年記念式典が開催され、私は来賓として出席しました。

JOINは1996年に、国際平和友好都市の構築を目指して設立されました。以後、「多文化共生社会の創成」「グローバル意識の醸成」を理念に掲げ、生活日本語教室、外国人相談や通訳講座など多岐にわたる活動をしてきました。

JOINの資料によれば、上越市に居住する外国人は、2016年が1117人、24年が2377人に達し、僅か8年で2倍に増加しています。

JOINの活動は、外国人の方々の多様化するニーズに対応し、地元住民と外国人との間の相互交流と相互理解に積極的な



大崎ジェナリンさん「文化や言葉の違いで困らないように支援していきたい」

貢献をするものと思われまふ。式典では、フィリピン出身の大崎ジェナリンさんが、上越地域在住のフィリピン人の交流団体を立ち上げる予定であることとお話しされました。上越市在



オーガニックスフェスタ上越 『里山のふところ 生きるマンマ、おかわり!』

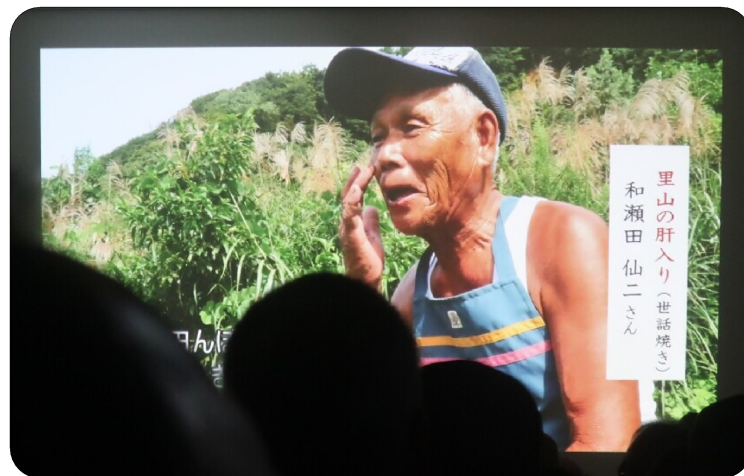
10月26日は、「上越オーガニックスフェスタ」の上越会場（謙信公武道館）に行き、2017年にJCVが制作したテレビドキュメント番組『里山のふところ』を観ました。

私が桑取・中ノ俣でお世話になっている和瀬田仙二さんが登場し、しかも、いつもお世話になっているNPOの方々や地元の人々が次々に登場して感激しました。しかも、皆さん飾ることなく普段のまんまの姿なのですが、その姿が実に生き生きと映されていました。

上映後、制作者の荒川毅さんにもお会いしました。

荒川さんはBSN上越支社に勤務していた際、桑取などの上越地域の自然や人に魅せられて、40歳でBSNを退社、その後は高田に居を移して人生の再スタートを切りました（荒川さんが育ったのは新潟市の新潟三越の裏あ

住のフィリピン人は24年時で961人（上越市の居住外国人の40%）です。一昨年の能登半島地震で多くの人が避難対応で習慣や言葉の壁を実感したことが、団体設立への動機になったとのことでした。まさに、共生社会への実践であり、今後の活動に注目です。



いつもと変わらないそのまんま姿の和瀬田仙二さん

10月18日「越後・謙信SAKEまつり」

18日は、午後から雨の予報だったので、午前中に歩きました。

私は、余り酒が飲めないもので、もっぱら食べ物屋さん巡り。普段行っているお店や高田の市（いち）で出店しているお店にご挨拶しながら、いろいろ買い込んで、事務所でゆっくり食べました（写真は、天ぷら若杉さんと）。

天気も、18日の午後、19日の朝方に雨が降ったものの何とか持ちこたえてくれました。

来場者は、前年比30%増の4万人（実行委員会発表）、高田の街の秋のお祭りとしてすっかり定着しました。来年も楽しみです。



たりだったとか）。『里山のふところ』は自らが還暦を迎える時期に、地域への恩返しにという思いで制作されたそうです。作品は、「地方の時代」映像祭で優秀賞を受賞しました。国内はもちろん、国外からも高い評価を受けています。映像を通じて地に足のついた生活、昔と変わらない扶けあいの精神が伝わってくるからだと思います。作品は、11月29日高田世界館で開催される「第5回上越☆農業映画祭」でも上映されます。見逃した方、是非高田世界館で。

発行責任者：馬場ひでゆき事務所

住所 新潟県上越市本町3丁目3番3号

ダイヤパレス高田武番館2階

電話 025-546-7110

ファックス 025-546-7666

メール kengi-babahideyuki@wind.ocn.ne.jp